

鎮守さまと私とホタル



雄琴神社氏子 宮田 次男

一、明神さま

私の住んでいる壬生町には、雄琴神社がございます。そして、神社と私の関わりは、私がまだ四歳か五歳のころ、杉ッ葉拾いから始まりました。

秋から冬、春先にかけて、風の吹く日は母親に連れられ、兄弟達とよく出かけたものでした。

また、いつの頃からかは分かりませんが、神社は明神様と呼ばれていました。

その神社の裏を這うように、黒川が流れています。川原へは、参道を歩き、境内を突っ切って行きました。川原の石は、一ツ一ツ洗ったようにきれいでゴロゴロとし、水はガラスのように透き通り、所々に砂地があり、素晴らしい所でした。

二、遊び場

今から四十年以上も前になりました。境内はいつも私達の遊び場としていました。毎日、



雄琴神社御社頭

実によく遊んだものです。学校が休みの日は勿論の事、早く帰って来た日などは、自然と足が神社に向きました。

境内には必ずといって良いほ

ど、三、四人の子供が来ていて、遊びの中心は、もっぱら野球でした。人数が足りないときは、少し待っていると、必ず何人かが来ました。

竹のバットに柔らかいゴムボール。

一塁ベースは、あの太い杉の木の横五メートル。

二塁ベースは、だいたい小屋の角。

三塁ベースは、

拜殿の石塀。

現在、社務所が建っているあたりは、杉林となっていてそこに入ればホームラン。ルールは、いつも決まっていました。

三、幼少の頃

境内の入口には、ひと際目立つ榎の木があり、その木にはウロがあり、カブト虫、クワガタ虫、カナブン、時には好ましくない、スズメバチやアブなどもありました。

また、いたる所にブヨがいて、よく刺され、痒く赤く腫れ上がったのを憶えています。

四、祭の思い出

数ある思い出の中でも、やはり祭りが一番の楽しみでした。特に、十一月の祭りには、境内で芝居が行われ、筵を敷いてた

くさんの人が、見物をしていました。

母の実家の祖母も、芝居を楽しみに泊まりがけで観に来ました。

役者の振り回す刀が、本物だと思い、本当に切られてしまうのかと目を凝らして見ていました。

参道では、カーバイトを燃やした明かりの中に、夜店がところ狭しと並び、行きかう人で賑わいを見せていました。

揚げたての芋フライを、バット一杯に入ったソースの中で泳がせ、食べた味は忘れることができません。

五、四季折々

そんな思い出深い場所も、時代とともにすっかり様変わりし、河川の両岸は整備され、公園と化し、つり橋が架かり、桜の名

所として蘇りました。

つり橋から上流に目をやれば、日光の山々が、東雲橋の奥手に大きく聳え、四季の織り成すその景色は、絵はがきに勝るとも

劣らない眺めです。

そして、あの榎の木は、今も根強く、時よりカブト虫やカナブンを呼び寄せ、子供たちの変わらぬ人気の場所の一つとなっ



つり橋から見た雄琴神社の社叢

ております。

六、ホタルの会の発足

昭和五十九年、氏子青年会の発足に伴い、会員の募集がありました。その時、私は何の躊躇もなく、喜んで会員となりました。それは、たぶん神社が自分の心の中に、身近な存在としてあったからだと思います。

近年、「自然」に関心を持ち、ビオトープを進めている学校や地域が沢山ございます。

今年六月、神社裏の「みたらし水路」に、ゲンジボタルが飛び立ちました。

それはおととしの九月、神社の研修旅行に参加した時のこと、榛名神社、妙義神社に向かうバスの中、「今度、ホタルでも飼おうか」その何気ない一言がキッカケでした。すかさず、一緒に参加した仲間が言いました。そ

れはいい、そうしよう……しかしとか、だけどの否定的な言葉は、全くありませんでした。

とは言うものの、ホタルに関しての知識は、誰もありません

でしたので、早速、図書館やらインターネットやらでこと細かく資料を集めました。

根が生き物を飼うのが好きだったことも手伝って、負担にはな



「みたらし水路」 川下より、川上を見る

らず、むしろ楽しみながら出来ました。

そして将来、ホタルをどこに放流するか話し合ったところ、十六年三月にみたらし水路との目標ができ、同時にホタルの会も発足しました。

七、幼虫の孵化に成功

併せて、餌となるカワニナも試験的にその水路に放しておいたところ、十一月には、見事に無数のカワニナの稚貝が確認出来ました。

お膳立ては揃った。皆そう思いました。

しかし、これからが正念場、肝心のホタルをどのようにしたら手に入れられるものなのか、全くあてがありませんでした。

そうこうしながらも月日が経ち、年が明けて三月、栃木市の農林課で、「出流山にホタルの

幼虫放流、親子二〇組募集！」の、新聞記事を目にしました。「これだっ」と思い、早速、子供を出しに申し込みました。

そして、鹿沼市のさつきヶ丘ホタルの会のメンバーと知り合い、何度かコンタクトを取るうちに幼虫十二匹を分けて頂きました。その幼虫を育て、その夏は自宅で八匹が成虫として飛びました。そして、交尾、産卵を経て二千匹近い幼虫が孵化したわけでございます。

ホタル舞うその頃、会員の間では思い思いの飼育槽を作り、それぞれを披露し、研究を重ねてまいりました。そして、大きく育てた幼虫をそれぞれが持ち寄り、当初の計画より一年早く、今年三月、第一回目の放流となったわけでございます。

そして、六月には、眩いばかりの光を発し、空間高く舞い上がり、皆さんを魅了したわけで

ございます。

壬生町以外の方からも問い合わせがあり、みたらし水路は、連日の様に、キャーキャー歓声が上がリ、宮司さん宅では今までにない、やかましい夜を過ごしたのではないかとお察し申し上げる次第でございます。

また、今年新たな会員も増え、来年はみたらし水路で生まれるホタルと共に、かなりの数のホタルが舞うことが予想されます。

神社にこの時期、紫陽花の花と共に、もう一ページホタルの舞が加わったこと、皆さんと共に喜んでいきます。

最後に、田辺総代会長さんから、「人に恵まれ、時に恵まれ、場所に恵まれ」と教えられました。これからも出来る限り、皆様と共に、神社の活動に参加していきたいと思っております。

(平成十五年九月十一日、特別寄稿)

比企理恵さん参拝



比企理恵さんの参拝の様子

日光弥生祭のあい間で一息つく



本誌前号(第三十二号)で吉田庁長と「神社と癒し」をテーマに対談されたホリプロ所属・女優比企理恵さんが平成十五年三月二十三日に日光二荒山神社を参拝のため訪れた。

比企理恵さんは、「神社でトリング」の著書の中で、以前に参拝した神社は、関西方面にたよっていたので、吉田庁長が、対談の際に日光へも是非参拝に訪れて下さいと云う勧めによったのだろうか。当日は、四名で昇殿参拝をされた。